

デューイ教育学パラダイムの探究をふりかえる

— デューイ研究でたどる自己形成史 —

An inquiry into the development of John Dewey's pedagogical paradigm

早川 操*

HAYAKAWA Misao*

キーワード：ジョン・デューイ，教育学パラダイム，大学院教育，人間の課題，共通の信仰

Key words: John Dewey, pedagogical paradigm, graduate education, problems of men, a common faith

はじめに——大学で学ぶことの意味

デューイ研究に取り組んで40年以上が経った。今回の退職を機に、自分の研究生活にとってデューイ研究はどのような意味をもっていたのかをふりかえてみたい。ジョン・デューイ(1859-1952)は、100年前の20世紀前半に活躍した教育学者であり、第二次世界大戦後のわが国の学校教育に影響を与えた。彼の影響は、大正時代の自由教育にも及んでおり、一世紀以上にわたってわが国の教育界に影響をもっている。

デューイはさまざまなテーマについて研究したが、教育関係者によく知られているのは「問題解決学習」の提案である。民主主義社会に生きる人間は、自分が置かれた状況の問題や課題を改善していく自律的で協働的な探究者であることが求められる¹⁾。研究を始めた頃は、問題解決学習はすでに多くの人が知っているテーマなので、その意義に気づかなかった。その後、大学での講義のテーマとして問題解決学習を取り上げてきた。ふりかえてみると、意識しない間に問題解決というスタイルが自分の生き方の根底に入り込んでいることに気づかされた。私たちが生きることは、変わりゆく状況のなかで出会うさまざまな問題や課題に向き合い取り組んでいくことにほかならない、と思うようになった。

知識を学ぶことによって、自分の置かれた現実状況をさらに深く理解し、自分の生き方を変えることができるのか。知識を学ぶことと行動することを融合させることによって、どこまで状況を変容することができるのか、どれほど自分の生き方を変容し成長することができるのか。これが、私の日常生活や生き方に影響を与えたデューイ研究のインパクトだった。

1. これまでの教員生活をふりかえる

(1) 研究のパラダイムを探す——デューイ研究の影響

1970年代の大学では、「学問のパラダイム」という考えが話題になっていた。T.クーンによれば、それぞれの学問には模範や基盤となる理論モデルがあり、それをパラダイムと呼んだ。研究の出発点は、学問の範型であるパラダイムを学ぶことにあるという考えである²⁾。充実したカリキュラムが提供され、それを学ぶことで学問の原型や体系を身につけていく。さらに研究を深め、そのモデルを超えるような学問研究のオリジナルなパラダイムを創出することが研究者の理想とされる。

カリキュラムのイメージは、示されたコースを辿っていけばゴールに到達するというものである。その間、与えられたコースをしっかりと走ることが求められる。学校教育や大学教育の良し悪しは、用意周到に設計、計画、実施された教育プログラムの充実度によって決まる。20世紀のアメリカ大学や大学院は、カリキュラムや研究指導が綿密にプログラム化・構造化されていることが世界中に知られていた。大学のコースワークの充実度やゴールに辿り着くまでの学習要件が明確であるかどうかは、学問のパラダイムを学ぶための必要条件であった。

私が選んだデューイ研究は、教育学の領域では小さいながらも一つの研究パラダイムになっていた。教育学の研究として何を学ぶのか。研究者としての自分のアイデンティティを築き、他の人から研究者として承認してもらうためのテーマとして選んだのは、デューイ研究だった。日本では、戦後のアメリカ民主主義教育導入期の頃からデューイ研究が継続されてきた。デューイの個人名がついた日本デューイ学会もあり、その学会に参加して研究活動に取り組むことで、研究者として承認されていくという道を選んだ。

* 椋山女学園大学教育学部／椋山女学園中学校・高等学校 校長
2021年11月9日受付

(2) アイデンティティ論から生き方を考える——エリクソンに学ぶ

エリクソンの発達課題論や青年期のアイデンティティ論は、教育学を学んでから知った³⁾。今も教育本質論やカリキュラム論の授業で、アイデンティティ論の講義をしている。青年期は何をする時期なのか。研究という職業をめざすなかで、自分の生き方について考えること、自分のやりたいことを見つけること、自分が貢献できることを探すことの意味を考えた。その後、アイデンティティ論は、40年にわたって大学という世界で働く自分の人間的な成長を考えるための試金石となった。また、大学や教室で学生と出会うことで、現在を生きる若者の行動や生き方を目の当たりにして、変化するアイデンティティ観について興味深く学ぶことができた。これからも子どもや若者が存在し続ける限り、アイデンティティ論の追求や考察は続くであろう。アイデンティティ論は、人間が生きることの奥深さを考えさせてくれる、尽きることのない興味深い考えである。

エリクソンの発達課題論の考えでは、アイデンティティを形成する時期は青年期の22, 3歳ごろとされる。1970年代には、アイデンティティ形成が30歳くらいまで延びているという見解が広がりつつあった。30歳くらいの若い成人期までアイデンティティ形成が延長され引き伸ばされている、という考えである。豊かさとともに、専門家社会が広がりつつあった時代であり、30歳くらいまで自分の可能性を模索し探求することを励ます考えが出始めていた時代であった。

同じ頃に、精神科医の小此木啓吾は、このような生き方を「モラトリアム人間」と呼んで批判をした⁴⁾。モラトリアムという考えも、自分の生き方に影響を与えてくれた。この考えは、30歳頃までに自分の生き方を見つけることを先延ばしすることの可能性とともに、永遠のモラトリアム人間になる危険性についても警鐘を鳴らしたことで話題になった。モラトリアムはなりたいたいものになるための猶予期間なのか、永遠の猶予期間になってしまうのか、という危険な賭けへの警鐘でもあった。モラトリアムという考えは、これで満足という思いをもてない人間にとっては、マイナスのイメージだけでなく、人間の生き方そのものの本質を表現していると考えられるのではないだろうか。モラトリアム論は、届きそうでなかなか届かない目標や理想を追うこととの可能性と危険性を教えてくれる。

エリクソンのアイデンティティ論が示唆するように、青年期の最大の課題は自分らしさを見つけることである。予期出来ない非連続の世界が突然やってくる近い未来においても、若者がみずからの人生の指針として参照できる理想の枠組みを見つける挑戦は続くであろう。

(3) 研究者をめざす——アメリカ大学院での学び

20代の後半に、3年間ニューヨークの大学院で学ぶ機会を

得た。アメリカ大学院への留学希望は、大学4年生の夏のアメリカ旅行でいくつかの大学を訪問したことが大きく影響している。1970年代のアメリカ社会は、自由や個性を謳歌していた時代である。若者も大人も、自由に自分のライフスタイルを追求できる雰囲気が広がっていた。個人主義の国アメリカで暮らしてみたい、アメリカの文化や学問を学んでみたいという思いで、アメリカ大学院への留学を考えるようになった。

たまたま1970年代中頃に、ラトガーズ大学教授のN. シマハラ教授が在外研究で名古屋大学に滞在したとき、インフォーマルなゼミ指導を受けた。教育人類学者のシマハラ先生は、異なる文化の中で自分の考えを見直し、より広い観点から考えるスタイルを学ぶことの大切さを教えてくれた。1960年代の激動のアメリカ社会を経験した同教授は、自由・自立と平等・公正の精神を追求する社会で生活することの意味を考えさせてくれた。アメリカで生活するには、自分の頭で考えて自分で判断することが大切であり、個人主義の文化や生き方を学ぶことを勧められた。アメリカの個人主義は、自由や自立を大切にす。自己主張と自分のスタイルを貫く激しさは、日本人にはなじみが薄い。日本人は控えめなのでもっと自己主張することを学ぶべきだ、とアドバイスしてもらった。

日本では組織や集団のなかで自分の位置を見つけることで、自分のアイデンティティを見いだす。他者と協調して支え合いながら生き、協力や協働の中で自分の個性を見だし承認してもらう。人とのつながりを大切にす組織の中で相互に依存しあいながら、分相応の分け前をもらう。日本の集団組織では、強烈な自己主張は嫌われる。若い時にはこのような日本的な人間関係の意味を十分理解できなかったが、ふりかえてみると気づかないところでこの恩恵を受けていたようである。人生のいくつかの重要な岐路で、先生方や同僚から支援してもらった。今も多くの人に支えてもらっていることに感謝したい。

50年近くたった今も、わが国の人間関係や組織のあり方の大枠や基本的なものは変わらないようである。21世紀になっても、「同調主義」の社会や教育が問題になっている⁵⁾。それと同時に、孤立と孤独にならないように配慮しながら、主体的な学びによる自立的な人間を育てるという課題が提案されている。孤立した人間やエゴイスティックな人間にならないで、自分のやりたいことを見つけるためにはどうしたらよいか。自分のやりたいことが、人のためになり、人を幸せにできるためにはどうすればよいか。この課題についても、今後の展開を見守りたい。

2. 教育研究を通じて人を育てる——大学の役割

(1) 斜めの関係を大切に作る——育ててもらった先生方の思い出

高校までは、個人的に影響を受けた先生の思い出はそれほど多くない。大学や大学院に入って初めて先生方から個人的な指導を受けることになった。大学や大学院で学問的人間的影響を受けた先生との出会いが、懐かしく思い出される。中学校や高校とは違う、「たての関係と斜めの関係」で出会った先生たちは印象的であり強烈であった。

先生方が書いた論文や著書を読んで、アイデアの世界が広がり膨らんでいくことを経験し、研究することの意義を学んだ。同じ本や論文を読んでも、大きく違う先生たちの解釈力や思考力に圧倒された。自分もこのようになりたいと思う学者としてのモデルが目の前にいた。

大学教員と大学院生・学部生とでは、専門知識や研究能力の点で大きな差がある。専門書の読み方の勉強、論文の書き方の学習、研究するスタイルの習得については、「まねる」ことから始めた。モデルとなる先生の思考方法や思考回路をまねる方法をとった。一対一や、一対二で指導をしてもらえる機会をもてたのは幸運であった。

指導教員とのたての関係は大切だが、直接の指導教員でないが面倒見のよい先生から受けた学問的影響も大きかった。斜めの位置にある先生とのインフォーマルな関係は大切である。先生との斜めの関係によって視野が広がり、考えることの大切さを学んだ。二人以上の先生に指導してもらうことの意味は、多様な評価や価値観を示してもらえることである。一人の評価では、もれたり見逃したりする観点があり、多角的な観点からの見方や評価が難しい。先生によって評価の視点や基準が異なることがあり、多面的な観点から見ることで、事実やアイデアの隠れた部分を明らかにすることができる。

(2) 日米の大学院の違い——学問の中心地

アメリカ留学は、ニューヨークのコロンビア大学に決めた。理由は、デューイが教えていたことと、アメリカ社会の変化を即座に知ることができたためである。日米の大学院では授業のやり方が違い、アメリカの大学院ではたくさんの本や論文を読まされた。課程修了のためにはいくつかの関門があり、英語での試験や成績評価のプレッシャーもあった。

アメリカの大学院に応募して学習するにあたって感じた、日米大学院の違いを紹介しておこう。

第一に、推薦書の役割である。大学院の入学にあたっては、推薦書が重要であることがわかった。現在ではわが国でも推薦書提出が普及してきたが、アメリカ大学院の応募には3通の推薦書が必要だった。当時の日本の大学院入試では推薦書は必要なかったが、3人の先生に1ページにおよぶ推薦書を

書いてもらうのは大変だった。

第二に、授業料支払い能力の証明書が必要なことである。留学するには、授業料を払える能力があるという保証書や証明書が必要であり、財源を示さないといけなかった。アメリカ大学院の授業料は高額だったので、奨学金探しが必要だった。奨学金を支給してくれる財団の試験には3年かけて3度も挑戦して、ようやく授与されることが決まった。奨学金財団の担当者からは、3回もねばって挑戦した人はこれまでにいなかったですよと言われた。

第三に、授業のスタイルの違いがある。授業料が高いので、授業内容の充実の基本条件であった。1970年代から、授業評価があった。これは学生自治会が実施をしていた。話し方がうまいこと、授業内容が充実していること、難しい内容を興味深くわかりやすく説明する力など、授業評価の質問項目にはどのような授業を理想としているのかが反映されていた。内容の薄い授業は、評価が低かった。高い授業料に見合った質の高い授業が求められていた。

自分が受講した授業担当の教授が上位にランクされているのを見て、優れた授業の特徴や共通性を考えさせられた。評価項目を見ると、求めている授業のイメージが明らかになる。単純な物理的条件から、高度な授業の能力や資質を求める質問項目までさまざまである。究極の授業、知性的で芸術的なアート、人類の知的活動の頂点とも呼べる大学や大学院の講義の評価はこれからも求め続けられるであろう。

第四に、英語で授業を受けたり、試験を受けたり、レポートを書くことの難しさである。外国人学生でも完璧な英語でレポートや論文を書くことが求められる。小さい時から英語で学校教育を受けていない外国人学生にとっての問題は、テストやレポートで完全な英語が書けないことである。レポートの場合には、提出前にアメリカ人の友人にプルーフリード（proofreading）という文章チェックを依頼した。それでもアメリカ人並みの洗練された英語は書けなかった。大学教員になってからも英語で論文を書くときは、必ずネイティブ・チェックを依頼する習慣が身についた。

論文を書くことの大変さは、日米どちらでも同じである。指導教員や試験官が期待するレベルと、学生が到達したレベルの格差を埋められるかどうかの問題である。博士論文の場合には、最終試問までに面接する教授たちから意見を聞いて論文内容を修正する。それまでのやり取りも教育的な指導で、学生にとっては研究のスタイルと論文執筆のノウハウを学ぶ機会でもある。それでも、最終口述試験の面接が終了するまでは緊張が続く。

30歳を前に、自分の生き方の指針をアメリカの大学院で考えた。教師になるにあたって、専門知識以外に必要なことは何か。誰かが助けてくれるのを待つだけでなく、自分から課題を見つけて、自分が何をできるかを考える姿勢を学んだ。自分一人ではできないことも、周りの人の協力を得てできる

ように努力した。留学中は多くの人から支えられ、与えられ、助けられたので、日本に戻って自分は何ができるのかを考えるきっかけとなった。

3. 成人期の課題—人を育てるといふ課題への挑戦

大学で教え始めるようになってからの自分の取り組みを、エリクソンの成人の発達課題である「人を育てる」という観点からふりかえてみたい。30歳頃から現在に至るまでの取り組みをふりかえてみて感じるのは、デューイ研究の影響が続いていることである。これまでいくつかの理論研究に取り組んできたが、それらの主要なものはデューイ・パラダイムに属するものであり、デューイのめざしたことを越えようとする試みや視点から学ぼうと取り組んだことを実感している。デューイが取り組んだ研究テーマは教育学以外にも幅広く及んでいて、現在でも多くの研究者に影響を与えている。

以下において、これまで取り組んできたデューイ・パラダイムの継承者と考えられる研究者や学者の見解を紹介したい。それによって、デューイ自身の考え方や生き方が、20世紀後半から21世紀にかけてどのように継承されてきたのかをふりかえてみたい。

(1) デューイの問題解決学習論—探究する人間

デューイは1952年に93歳で亡くなった。90歳を過ぎても論文を書いていた息の長い研究者で、その著作集は37巻におよぶ。アメリカや世界の問題にまで関心をもち、日本とも関わってきた。大正時代には日本を訪問して、東京帝国大学で連続講演をした。彼が取り組んだ研究テーマは、知識論、倫理学、社会論、教育論、芸術論、宗教論など多岐に及んでいる⁶⁾。幅広い研究活動を展開したので、その全体像を簡潔に説明するのは難しいかもしれない。しかし、これらの領域に一貫して貫いている姿勢がある。そこからデューイ・パラダイムの特徴を考えてみよう。

デューイの基調となる考えは、人間は置かれた環境のなかでやりとりをすることで経験を変容し続け、さまざまな問題や課題の改善や解決に取り組む、他の人々と協力して社会生活をよりよいものにしようとする情熱をもって取り組んでいくというものである。それは、問題解決や探究に取り組むこと、自分の経験や自分を取り巻く共同体をたえず改善していこうとする姿勢である。人生は問題解決の連続であり、人間は経験を組み変えて改造・改善することでたえず成長する。状況の変化に対応し続けるために、探究し続ける人間を育てるといふ考え方である⁷⁾。

デューイの考え方と生き方には、人間が生きることは問題を解決し続けることである、という基本姿勢がある。多い少ない、大きい小さいという違いはあれ、人生は問題の連続である。その解決に取り組むことが人間の成長につながる。問

題解決の過程で知識を活用するとともに、直観力・思考力・想像力・行動力が鍛えられる。自分のアイデアを他の人に伝えて共有することで、サポートしあい助けあう協働関係やつながりを強固にする。コミュニケーションを通じて、自分の精神を豊かにし、公共的・社会的な共通課題を解決することもできる。

21世紀の現代社会でも、問題状況を感じ取る力、解決策を考える力、問題状況を変える行動力や実践力、継続して新たな問題状況に取り組むための情熱は、学校教育だけでなく広く社会で求められる能力である。現在より素晴らしい社会・文化・組織・関係・教育を後世に伝えていくことが、われわれの使命である。デューイは、教育をつうじてそのような崇高で美しい生き方や考え方を伝えようとした。さまざまな障壁を超えて、その姿勢を継承し探究することがわれわれの使命であるといえよう。

(2) ケアリング論—ノディングズによる優しさの追求

デューイの基本的で主要な考え方の一つは、「経験」である。経験は、われわれが日常の生活で展開する活動である。デューイの場合、経験の考えに深みをもたせるために、経験には構造があると提案する。経験は「相互作用と連続性」という横糸と縦糸で構成される。相互作用は人とのやりと人とのやりとりであり、連続性は経験のつながりを意味する。人間にとっての成長は、人と人とのやりとりが豊かになることで、経験の意味が増大し深まることで促進される。

デューイの経験の考えに基づいて、ネル・ノディングズは、人と人とのつながりを大切にする「ケアリング」の観点から教育の出発点を説明した⁸⁾。ケアリング論は、育てる-育つ関係の中で、成長の連続性が継承されていくことを提案した実践的な理論である。

ケアリングの目的は、教え育てる相手が成長することの意味を学ぶことにある。ケアリングにおける成長は、自分自身でケアできるようになること（自分へのケア）と、他者をケアできるようになること（他者へのケア）をめざす。その結果として、他の人と協働して新たな関係づくり（ケアリング）に取り組めるようになる。

ケアリングがめざすのは、ケアされる人が自立と協働を学び身につけることである。母と子の関係、教師と生徒の関係は、ケアリングの基本的なモデルである。ともに、望ましいつながりのなかで人を育てることの大切さが伝えられていく。

ケアリングのもう一つの特徴は、育てられ教えられる関係のなかで、特定の対象に心を向けることを学ぶことである。それは興味や関心の対象を見つけることである⁹⁾。ケアされ教えられる過程で、関心の対象を見つけて、自分の関心の世界を広げていく専心没頭の姿勢や態度が継承されていく。興味ある学習活動を見つけ取り組むことで、経験の世界が広が

る。ケアリング（興味・関心をもつこと）は、学習する対象と自分の精神を結びつける。ケアすることは、個性的な精神の世界を創造する出発点であり、母体となる。一人ひとりの個性的な学びを育てるためには、ケアする関係が存在しなければならない。

ノディングズは、つながりや成長を重視するケアリングは、女性が大切にしてきた価値であり徳であるという。守られること、希望を育てること、信頼関係を築くこと、生きる喜びを感じることは、理性的な人間を育てることと同様に大切な価値である。人間のつながりには、優しさ、賢さ、強さが織り込まれている。ノディングズのケアリングの考えは、L. コールバーグが提唱した理性中心の道徳教育と肩を並べるパラダイムであると評価されている。フェミニズムやジェンダー研究の影響もあり、ケアリング論は道徳教育だけでなく、学校教育のあり方を検討するさいの指針にもなっている。

(3) 越境する知識人——フレイレとジルーから学ぶ

アメリカの教育界では、1970年代からブラジルの教育学者パウロ・フレイレの「解放の教育学」が話題になっていた。彼は、ブラジルの農村社会で「識字教育」に取り組んだ。フレイレは、学校に行けなかったため読み書きができない貧しい農民に文字を教えることで、自らの置かれた状況を理解し変えていく識字教育を指導した。彼は成人識字運動の実践家・理論家として、世界の多くの教育者に知られていた。20世紀の人類の課題は「抑圧からの解放」であるという主張と実践によって、フレイレは世界の教育者に知られることとなった。

フレイレが抑圧の教育から解放の教育のモデルの説明に使った「銀行型教育」と「問題提示型教育」という考え方も興味深いものであった¹⁰⁾。銀行型教育が貯金のように一方的に知識を与えられるのに対し、問題提示教育は、課題を示されることでその大切さに目覚めて、いっしょに協働して状況を変える「共同探求者 (co-investigator)」を育てることをめざす。そのような探求の過程でリーダーもフォロワーになる、という考えも新鮮だった。抑圧する人間のメンタリティを、フロムのことばを使って「あることは持つこと」と表現したのも興味深い。

アメリカにいたときに、ヴァーモント大学でのフレイレのワークショップに参加した。過激な考え方や生き方にもかかわらず、セミナーでは温厚で謙虚な人柄が伝わってきた。ブラジルでの成人識字教育によって農民の解放と自立を実現するという過激な政治教育的な行動のため、刑務所に入れられ独房に閉じこめられた経験のあるフレイレであるが、強い意志を和らげる穏やかな表情が印象的であった。

ヘンリー・ジルーは、多文化社会であり高度情報化社会であるアメリカで、人種、ジェンダー、階級などをめぐりさまざまな声や差異に注目して、自己の変容と社会の変革をめざ

す「批判的教授学」を提案する¹¹⁾。若者が自分の認識の枠組みを超えて行き来すること（ボーダークロスすること＝越境すること）で、多様な焦点をもったアイデンティティを築くことを提案している。さまざまな立場や意見を行き来することで、生徒は多様な視点から考え行動できる「ハイブリッドなアイデンティティ」を形成できるという。

多様な視点や立場とのやりとりを通じて自らの境界枠（ボーダー）を広げるというジルーの考えは、「越境教授学 (border pedagogy)」とも呼ばれる。多文化社会でボーダーを超えて多様な視点・焦点を採り入れて自己変容をめざす越境教授学は、協働による社会変革をめざす教育を提案した1930年代のデューイの社会改造的な立場を継承するものといえよう。

(4) 状況を動かす反省的实践家のわざ——ショーンから学ぶ

反省と実践ということばを使って専門家として成長することの大切さを提案した研究者に、ドナルド・ショーンがいる。彼の理論は、「反省的实践 (reflective practice)」(もしくは省察的实践)と呼ばれている¹²⁾。彼は、ふりかえりと行動を融合した教育的な実践理論を提案した。わが国でも、反省的实践モデルに基づいた教師教育が実践されている。教師は、ふりかえりの力と改善のための実践の力を結合して、さまざまな活動をより良いものにしていく「反省的实践」に取り組む。ショーンは、デューイの反省的思考や問題解決学習の伝統を継承し、独自の反省的实践論を展開した。

ショーンは、専門家がどのような思考や行動をするのかを分析することで、反省的实践論を展開した。彼の出発点は専門的な判断が求められる状況であり、専門家はその状況からの「語りかけ」に応え、状況をより良いものに改善していく実践に取り組む。この立場は、デューイの反省的思考や問題解決学習と共通点がある。反省と実践は、デューイの提案する経験を構成する二つの中心概念である「思考と行動」にあたる。ショーンの特徴は、専門家の実践に織り込まれている「暗黙知」の働きを分析して、反省的实践の理論を展開したところにある。

たとえば、教えるという行為についても、教師が教える技を工夫する「反省的教授」と、提示された知識や技を生徒が学ぶ「反省的学習」のやりとりとして分析されている。デューイ流に言えば、教えることによって、教師も生徒もともに反省的思考に取り組むという活動である。教師は生徒からの反応にตอบสนองし、生徒は教師の技から学ぶ。授業は、「相互反省的思考」が展開される「協働的探究」の場である。直観的ふりかえりと直観的行為が融合された反省的实践は、教師と生徒がともに成長する可能性をもった道徳的なわざでもある。教えるということがわざ・アートであり、教師も生徒もともに成長する「モラル・クラフト (道徳的なわざ)」であることを、反省的实践は教えてくれる。

教師という職業は、生涯にわたって反省的実践に取り組む仕事である。ふりかえりによって実践する力を見直し改善することで、専門家として成長する。ショーンの反省的実践の考えは、たえず状況とのやりとりや対話から学ぼうとする専門家への励ましであるといえよう。教師は、いたるところで学ぶことを見つけ改善する「反省的協働探究者」である。

(5) 「あること」という生き方——フロムから学ぶ

エーリッヒ・フロムは、20世紀の人間、社会、文化の課題と行方を深く追求した学者であり批評家である。フロムによれば、20世紀の人間の特徴は、「もつこと (to have)」という生き方が人を幸せにしてくれると信じさせられていることであるという¹³⁾。人間はたくさんものを所有することで幸せになれる、自分のものがたくさんあるから幸せだ、という考え方である。

知識についてもたくさんもっていることが大切で、それによって学校で優秀な成績を獲得し、学歴も高くなり、幸せな人生を送れる。この考えは、21世紀の今でも続いている。もつことという生き方は、もっているものがなくなれば不安になり、奪われたら怒りや憎しみを感じる生き方である。20世紀の人々はもつことが豊かさや幸福感の源であると信じさせられ、たくさんもつことをめざして全世界で競争が生じた。

それに対してフロムは、個人が自由であり幸福であるのは、多くもっているからではなく、「与えること」ができるからであるという。それは「あること (to be)」という生き方である。奪い取って快感を感じるのではなく、与えることで安心を得て、分かち合うことで連帯を実感し、成長することで喜びを感じる精神を育てることをフロムは提案する。共有できることや与えることができる生き方によって、人々の共存や連帯を促進するという提案である。こころの豊かさや安らぎを大切にすウエル・ビーイングの時代には、安心や安全についての考え方の転換が必要かもしれない。

誰にとっても、もつことという生き方なくして生活するのは難しい。現実には、もつこととあることのバランスを見つけることが必要であろう。もつことの弊害を少なくするためには、多くの人を利する公共的で協働的な活動に参加することが望ましい。自分が貢献できるものを見つけることで、自分の存在意義を実感することができる活動への参加である。そのような公共的協働活動への参加には、全体の部分となって貢献し、共通に分かち合う勇気が求められる。その意味では、多様な協働活動に参加することで、多様な「あること」を経験できることになる。ジルーの越境する勇気と同じように、われわれは置かれた状況において、さまざまな方向に向かって越境することができるのかもしれない。協働活動に参加して部分となり自己自身を創る力がある人は、生きる力もそれだけ強いといえよう。

以上の5つの研究事例は、これまで取り組んできたデューイ研究の系譜やパラダイムの延長線にくると考えたものである。すべての考えに共通しているのは、デューイが提唱する人間の経験を広げ深めるための教育の可能性についての探究である。21世紀においても、人間の経験の可能性を追求する研究パラダイムがさらに展開されることを期待したい。

まとめ

これまで取り組んできたデューイ研究と、それに関連する研究から得た示唆や意義を考えてみた。研究を始めた頃は、大学での授業の題材や論文を書くための資料として活用しようと思っていたデューイ研究が、いつの間にか自分の生き方を確認し方向を示す指針となっていた。知らないうちに、自分はこのように判断するが、デューイであればどのように判断するだろうかと考える習慣が身についていた。デューイの考えは、自分が追求したい考えや理想を判断する際の試金石になっていた。これからも新たに出版されるデューイ研究から学ぶことで、自己形成理論や探究理論の展開を見守ってきたい。

本論はエリクソンのアイデンティティ論から始めたので、まとめも老年期の発達課題である「統合力」(integrity)について考えることで締めくくりたい。

人を育てる成人期の自己形成の鍵は、他者を育成することである。成人期の自分らしさは、どんな人に関わったか、どんな支援ができたのかで判断される。成人の創造性は、人を育てることにあるといえよう。それに対して、老年期の自己形成の課題は、人生の総括であり円満に生きることである。統合力という課題は、これまでの経験をふりかえって評価して、これでよかったという満足感と安心感を得ることで実現される。そのような生き方をつうじて得られる人間的な徳(強さ)は、「知恵」である。生まれただけの乳児が獲得する人間的な徳は生きるための「希望」(hope)であるが、老年期においても次の世代に希望を託すための知恵を学ぶことが求められるであろう。

デューイは、75歳の時に書いた『共通の信仰』で、次世代に伝える人間共通の責任や思いを「誰もが共通に信じること」として次のように述べている¹⁴⁾。

「私たちの責任は、自分が受け取った価値ある遺産を守り、伝え、修正し、拡張することであり、さらに確実に、安全で、使いやすく、共有しやすいものにして次の世代へと受け渡すことである。この思いをもっとはっきりと積極的に提案することが、われわれの共通の信仰である。」

次の世代がより幸せに生きることを祈る希望のことばである。デューイは、この思いを誰もがもってほしいと願う。こ

の思いは、青年期のアイデンティティ追求の時期や、成人期の人を育てる力の追求の時期においても共通の信念として持ち続け、老年期でもその実現を支援するために探究し続けた課題である。デューイが提案する誰でも信仰が、21世紀の人間の課題として共有されていくことを見守りたい。

謝 辞

椙山女学園ならびに教育学部のますますの発展を祈り、これまでのご支援に対してお礼申し上げます。

参考文献

- 1) J. デューイ, 松野安男訳『民主主義と教育』岩波文庫, 1975年。早川操「20世紀教育理論の変遷と課題—理想的実践主義から見た教育理論—」加賀裕郎他編『プラグマティズムを学ぶ人のために』世界思想社, 2017年。
- 2) T. クーン, 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971年。
- 3) E. エリクソン, 小此木啓吾訳『自己同一性自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル—』誠信書房, 1973年。
- 4) 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中公論新社, 2010年。
- 5) 中央教育審議会「令和の日本型学校教育の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現—」2021年3月。
- 6) 早川操『デューイの探究教育哲学—相互成長をめざす人間形成論再考—』名古屋大学出版会, 1994年。
- 7) 早川操「わが国におけるデューイ探究学習の受容と変容—20世紀の問題解決学習から21世紀の探究学習へ—」日本デューイ学会編『民主主義と教育の再創造』勁草書房, 2020年。
- 8) N. ノディングズ, 立山善康他訳『ケアリング—倫理と道徳の教育 女性の観点から—』晃洋書房, 1997年。早川操「変動する社会における教育と人間像—ケアする人間を育てる教育—」『教育と医学』No. 665, 2008年。
- 9) 早川操「『ケアリングマインド』育成のための教育理論とその課題—N. ノディングズによるケアの連鎖構造と同心円構造の考察を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要(教育学)』第45巻第2号, 1999年。
- 10) P. フレイレ, 小沢有作訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房, 1979年。早川操「対話と協働—批判的反省に関するデューイとフレイレの見解をめぐって—」杉浦宏編『デューイ研究の現在』日本教育研究センター, 1993年。
- 11) H. ジルー, 渡部竜也訳『変革的知識人としての教師』春風社, 2013年。早川操「越境教授学の挑戦—H. ジルーによる公共的知識人育成の教育理論—」『情況』情況出版, 2000年4月号。
- 12) D. ショーン, 柳沢昌一他訳『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』鳳書房, 2007年。早川操「教師・生徒間における反省的教授—デューイの相互反省的思考の展開—」杉浦美朗編『教育方法の諸相』日本教育研究センター, 1993年。
- 13) E. フロム, 佐野哲郎訳『生きるということ 新装版』紀伊国屋書店, 2020年。
- 14) J. デューイ, 栗田修訳『人類共通の信仰』晃洋書房, 2011年。